

発達障害児に対するピアノレッスンメソッドの実際

— 事例を振り返って —

末 永 雅 子 ・ 和 田 玲 子

The Realities of Piano Lesson Methods for Children with Developmental Disabilities
—A retrospective reflection on one case—

Masako SUENAGA, Reiko WADA

広島文化学園大学 学芸学部 紀要 第14号 (29頁 — 37頁)

2024

Reprinted from

BULLETIN of the HIROSHIMA BUNKA GAKUEN UNIVERSITY
Faculty of Arts and Sciences

Vol. 14 pp. 29-37 2024

Hiroshima, Japan

発達障害児に対するピアノレッスンメソッドの実際 — 事例を振り返って —

末 永 雅 子 ・ 和 田 玲 子

The Realities of Piano Lesson Methods for Children with Developmental Disabilities —A retrospective reflection on one case—

Masako SUENAGA, Reiko WADA

The authors have been teaching piano lessons to children with developmental disabilities, including autistic children and children with attention deficit hyperactivity disorder. They have implemented piano lessons from the perspective of music therapy, performed counseling for parents and guardians from the perspectives of music therapy and psychotherapy, and have continued to support local children with developmental disabilities. This research retrospectively reflects upon a case where the Piano Practice Anthropological Method established by the authors was implemented, and considers the state of piano lessons and ways to support parents and guardians. The authors intend to objectively comprehend their findings as common denominators of the problems that many piano instructors face, and apply them toward the implementation of better piano lessons moving forward.

キーワード：

Piano practice anthropological method (ピアノ実践人間学的メソッド),
Children with developmental disabilities (発達障害児), Music therapy (音楽療法)
piano lesson (ピアノレッスン), Counseling for mother (母親へのカウンセリング)

所属：

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences
音楽学科 Department of Music

1. はじめに

筆者らは、2016年にピアノ講師を対象とした講座『音楽療法を活かしたピアノレッスン』を開催し、発達障害児の特徴を理解した上でのピアノレッスンの在り方について提案し、参加者との情報交換を行った。その結果、多くのピアノ講師が発達障害を持つ子どもへのレッスンを経験しており、対象者への接し方のスキルと、具体的な指導方法を知りたいという切実な思いを持っていることがわかった。そこで、2017年以降、ピアノ講師をめざす学生が履修する「ピアノレッスンメソッド」と、音楽療法士(1種)

の資格必修である「音楽療法実習」を連携させ、「自閉的傾向の疑いのある子」「ADHDの疑いのある子」などの発達障害児を対象としたレッスンを実施した。その結果、音楽療法を活かしたピアノレッスンは、反転授業を取り入れた総合的な「ピアノ実践人間学的メソッド」として、学生の人間的成長に繋げるという成果を果たした(末永・和田2020)。

その後、末永と和田は「ピアノ実践人間学的メソッド」として確立した方法をもとに、さらに実践を行った。今回はその中から一例を取り上げる。このレッスンは、1年以上継続したが、ある時、保護者からの申し出により、レッスン

を終結することとなった。この事例に関して、レッスンを行った末永の指導内容と、音楽療法士・臨床心理士の和田が母親に対して行ったカウンセリング内容（Aさんのレッスンと同時進行で、別室にて実施）を照らし合わせながら検討していきたいと思う。

2. 事例の概要

2-1 倫理的配慮

本事例の論文執筆等に関して、本学の倫理委員会の承認を得て実施し、対象児の保護者からも承諾を受けている。また個人情報配慮する目的から、本事例の内容が大きく変わらない程度に加工している。

以下対象児をAさんとする。

2-2 対象児

Aさん 小学校1年生（7歳）女児 特別支援学級に通っている。

診断名：発達障害（3歳10ヵ月に診断を受ける）

家族構成：父・母・Aさん・妹（5歳）

生育歴：首がすわる・歩行するまで特に身体的発達に問題はなかったが、「よく泣く」、「食べ物の好き嫌が多い」等の困りごとがあった。保育園の先生に、「集団の指示について行けない」、「初めてのことにに対して参加することができない」などの指摘を受ける。

2-3 音楽園入園動機

母親の話・・・約1年前からピアノを習わせたくて、音楽園に問い合わせをしたが、コロナ禍だったため、保留にしていた。音楽には小さなころから興味を示していたが、特に、最近、妹がピアノを習い始めたことに影響を受け、ピアノへの興味を示すようになった。妹のピアノの先生の薦めにより、新しい経験ができるのかどうかと心配しつつも、本学の音楽園に連絡した。このピアノの先生は、筆者らの『発達障害児に対するピアノレッスンメソッド「ピアノ実践人間学的メソッド」』の論文から、本学で発達障害児に対するピアノレッスンを実施していることを周知されていた。

2-4 ピアノレッスンの方法（担当：末永）

開始時は月に2回の実施であったが、5か月後、保護者からの希望により月に3回に増やした。1回のレッスンは約30分程度。

レッスン内での様子と保護者に対するカウンセリング内容について、「ラポール形成期」「成長期」「低迷期～突然の終結」という3段階に分けて整理する。

2-5 カウンセリングの方法（担当：和田）

カウンセリングは母親に対して、傾聴することに徹した。回数・4回（X年11月5日～X+2年1月15日）時間：約30分程度

2-6 担当者

ピアノレッスン担当・・・末永

カウンセリング担当・・・和田

ピアノレッスンの内容とカウンセリングの内容を確認し、今後のレッスンに関して、ピアノレッスン担当の末永とカウンセリング担当の和田がディスカッションを繰り返し、次のレッスンへと繋げていった。

3. レッスンの内容と母親のカウンセリング

3-1 X年10月22日～X+1年1月7日 （ラポール形成¹⁾期）



写真① X年12月24日
指導者の話をじっくり聞く様子

3-1-1 ピアノレッスンの様子

X年10月22日 体験レッスン

始めは、顔を見て挨拶することも、自分の名前を言うこともできなかったが、ピアノの内部を見せて、自由に鍵盤に触れさせると、徐々に、その場に慣れ、「線がいっぱい入ってる」「大きい」と言葉が出るようになった。「ちょうちょ」「かえるのうた」など本人が知っている曲を歌った後、1本指を用いて連弾を行った。筆者が伴奏する速度や曲想に合わせて弾くことができた。

母親に聴かれることを本人が嫌がったため、レッスン中、保護者は教室に入らなかった。母親が傍にいるときには、後ろに隠れて全く声を発さないが、筆者とふたりでいる時には、受け答えがはっきりとして、積極的な様子を見せた。

X年11月5日

前回のレッスン内容をよく覚えていて、順調に進んだ。レッスンの合間に、自分からすすんで話をするようになり、小学校の音楽の授業でピアノを弾いたこと、算数が得意なことなどにこやかに話していた。挨拶もきちんと大きな声でできるようになった。

X年11月26日

この日は、初めて父親が付き添ってきた。母親に対する態度とは異なり、父親には甘えて離れようとせず、なかなかレッスンを始めることができなかった。この頃から、Aさんが苦手とする内容が明確になってきた。「右」「左」など簡単な漢字も理解が難しく、さらに、自分に理解できないことがあると、それを非常に気にして他のことが手につかなくなる。そこで、楽譜はコピーした上で、印刷された文字の部分は切り取ってAさんの目に入らないように工夫した。

その夜に、母親からメールで、「宿題をしなくてもよいのか」との問い合わせがあった。現在は、自宅練習が必要な内容ではなく、レッスン内で十分進展させることができていると伝えしたが、妹のレッスンでは宿題が出ていて、Aさんにも自宅練習を習慣づけたいとの要望であった。そこで、「おうちで2かいひきましょう」などのコメントを楽譜に加え、ひとりでも自宅練習ができるようにした。

X年12月10日

Aさんが遠足で買ってきたお土産を母親から渡されたが、そのやり取りの中で機嫌を損ね、「ピアノは弾きたくない」「弾かないで家に帰るのも嫌だ」と、教室の外で母親との押し問答が10分以上続いた。

その後、自分から教室に入った後は、遠足の話をするうちに機嫌が直り、レッスンの後半は積極的に弾くことが出来た。

X年12月24日

読譜もできるようになり、ピアノを弾くだけでなく、歌うこと、リズムを叩くなど、できることが増えていった。「自宅で、妹にピアノを教えてあげた」とうれしそうに話し、ピアノに自信を持つようになっていく様子が見受けられた。

しかし、レッスン後に、クリスマスプレゼントとAさんに菓子を渡すと、受け取らず、怒ったような表情を見せて教室を出ていった。後日、母親から、Aさんがうれしいとか、恥ずかしいという感情をどう扱えば良いのか本人自身からわからないため、怒る、機嫌が悪くなるなど態度に出してしまうことが多いと聞き、コミュニケーションの難しさを感じた。

3-1-2 母親のカウンセリング内容

X年11月5日（1回目）

1回目のレッスンはとっても楽しかったと言っていた。妹と練習時に使用するキーボードを取り合わないよう調整していきたい。

ピアノを習うことに期待することは、〇〇しながら〇〇するというような2つのことが一緒にできないので、できるようになると良い。Aさんが、自分ができると思ったことができない時、絶望が大きくて物にあたるので、そのことが心配である。コツコツと練習したら上手になるという成功体験をさせたい。音楽を通して情緒を安定させたい。日常生活の中で癇癢をよく起こすが、自分でなんとかできるようになって欲しい。音楽が好きになって、いずれ歌も上手になって欲しい。（母親はAさんが、歌が驚くほど下手だと言ったが、末永のレッスン中には普通に歌うことができていたということであった。）

現在、困っていることは、服薬についてで、癇癢・暴言がひどいので薬量を医師が増やしてくれたが、今度は食欲が無くなり、味覚もおかしくなるらしいので、また薬の量を減らしたということであった。

また他に、Aさんは運動が苦手です。サッカーはボールを蹴りながら走るとかはできない、体のバランスが悪い等、が語られた。

3-2 X+1年1月7日以降～X+1年3月

（コロナの影響で音楽園でのレッスンが中止となった）

3-3 X+1年3月8日～7月26日（成長期）



写真② X+1年7月19日
読譜ができるようになった

3-3-1 ピアノレッスンの様子

X+1年3月8日

2か月ぶりのレッスンであったが、順調に内容を理解し、両手を使って弾くことができた。コロナ禍でできなかったレッスンの補講として、3月は3回レッスンを行った。

X+1年3月15日

今までは、母親に聴かれることを嫌がっていたが、自宅でも弾いて聴かせ、「もっと練習したら、先生驚くよ」という母親の言葉に、自分から進んで練習するようになったとの報告を受けた。母親に承認されることが、直接、Aさんの自信に繋がっているように見受けられた。

X+1年4月19日

「今日はこの曲を弾く」「次はこれをやる」とAさんに決めさせて、レッスンをを行うと集中力が持続する。そこで、レッスン開始時に、数枚の付箋に書いた内容をAさんに示し、彼女が選択した順に付箋を貼り、ひとつ終われば剥がすという方法を取り入れた。その結果、30分間集中してレッスンを受けるようになった。

4月から本人の希望で、月3回のレッスンに変更した。

X+1年4月26日

Aさんが自分ひとりでも解けるようなクイズ形式のドリルを渡し、できるところまで自宅でやってくるように伝えた。母親から、Aさんが持ち帰ったドリルをととても喜んでいてという報告があった。

3-3-2 母親のカウンセリング内容

X+1年4月19日（2回目）

ピアノは、まだできないことをやりたがる。たとえば両手で弾きたいなど。また妹が使っている可愛い教則本にあこがれている。母親はAさんのために、一緒に折り紙をよく折るが、Aさんの希望する作品は、立体的で難しいものが多く、やりたがってできない時は癩癢をおこす。特に、妹には負けたくない気持ちが強い。母親も余裕のないときは、「あんたには無理よ」と言ってしまう。妹は『げんこつ山のたぬきさん』を両手で弾いているので、Aさんも両手を使用して真似をするが、出来ないので癩癢を起す。

学校での状態は、授業中、うまくいかないことがあると、鉛筆を折る、鉛筆で消しゴムをぶっさす、プリントを破って踏みつける。大きな声で叫ぶ、寝転がる、机をひっくり返して、椅子をひっくり返して、と大変な様子であった。

母親はピアノレッスンを通して、練習はコツコツしないと上手にならないことを知ってほしい。ピアノを即興でどんどん弾くような、AさんのあこがれのYouTuberには、急にはなれない。いきなり富士山に登ろうとする。

母親は、Aさんに対して困っていることを、とうとうと吐露された。和田は母親の語られたAさんの内容が、レッスンで見かけるAさんの印象と全く違っていたので、とても驚いた。全体的にAさんに対して、否定的な感情が多いことが気になった。

3-4 X+1年4月中旬～11月29日

（低迷期～突然の終結）

3-4-1 ピアノレッスンの様子

X+1年5月前半

Aさんの家族がコロナに罹り、レッスンはしばらく欠席。

X+1年5月17日

自宅でピアノを弾く習慣が付き、「練習したよ」「楽勝だった」と自宅練習について報告するようになった。しかし、少しでも難しいと本人が感じたときには、「絶対にできない」と弾くことを激しく拒否する場面も増えてきた。そのような場合には、声をかけ、励ましながら、一緒に弾いた。できた時には、好きなシールを

選んで楽譜に貼らせるようにした。

4月のカウンセリングでは、母親から「妹が弾いている教材を使ってほしい」との希望が伝えられた。Aさんに用いている指導内容とは適合しない教材ではあったが、レベル的にかけ離れて難しいものではなかったため、希望に合わせて教材を変更した。

X+1年6月7日

妹が弾いている『こぎつねこんこん』を弾きたいというAさんの希望により、曲を練習させた。すぐに、両手で弾けるようになり、レッスンの終わりに、Aさんの演奏を母親に聴かせたところ、「妹は弾けなかったところが弾けて、すごい」と言われた。Aさんに読譜の基礎が身についたこと、最近では、よく練習をするようになり、上達していることを母親に伝えた。

X+1年6月14日

レッスンの冒頭で、「できないから弾かない」と言い張り、ほとんどピアノに触れなかった。レッスンは15分程度で早めに切り上げた。

3-4-2 母親とのカウンセリング内容

X+1年6月21日（3回目）

Aさんの調子が少し悪いということで末永からカウンセリングの依頼を受け、母親から話を聞いた。

最近では、全く練習していない。レッスン室でも弾かないことも多いようだ。うまく弾けないことにとってもこだわり、「できない」「できない」と口癖のように言っている。母親が「できてるんじゃないの」と言っても、「わからないけどできてない」と否定的な感情から抜けきれない。末永のことはとても信頼しており、レッスン中も甘えている。妹と同じ曲をしたいと言っている。最近ではできそうにないことにはチャレンジしないし、仮にチャレンジしても、できない時の癩癩はひどいものがある。母親もたまにかねて、「自分で決めたことせんと、ピアノはやめるよ」とAさんのピアノの成果を見たくて、きつく言ってしまったと後悔されていた。Aさんは5月末からとても荒れていて、「トイレで便が出ないし、おしっこの出し方がわからない」と訴える日もある。不調になると、自分を傷つけてしまうAさんに対して母親として、とても不安を感じると語られた。父親との関係はほとんど語られないが、和田が質問すると、仕事が

忙しくて、家にいる時間が短く、子供たちを全く怒ることはないということであった。一度レッスンに父親が同伴したことがあったが、末永の印象では、Aさんは父親とゲームの情報を共有し合い、まるで友人と話すような口調で、母親と一緒にいる時とは少し違った感じに見えたということであった。最後に母親が「妹は何しても可愛い」と言われたことがとても印象的であった。母親が、Aさんの子育てに対して、とても苦労されていることが窺われた。

3-4-3 ピアノレッスンの様子

X+1年7月26日

ドリルを渡した当初は新しい教材に喜び、自宅で数頁の課題をこなしていたが、7月に入った頃から、「忘れていた」と全く手をつけなくなった。無理にさせることはせず、レッスンの中で一緒に問題を解くようにした。ドリルの内容は色を塗る、線で囲むなど、本人がひとりでも取り組める単純な作業であるが、「わからない」を繰り返し、鉛筆や消しゴムで遊び、集中して行うことが難しい状況が続いた。

同様に、ピアノ教材にも苦心した。本人が弾きたい曲を簡易にアレンジして楽譜を用意したが、「できないから弾かない」という一言でなかなか弾こうとしなかった。レッスン時間内で弾けるようになり、以前のように母親に聴かせるように促しても聴かせることを嫌がった。

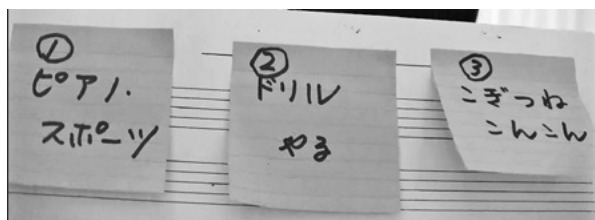
X+1年8月9日

レッスンの始めから、「できないから弾かない」と言い、ピアノには座らず、教室の中をぐるぐると歩きまわる。「今日はなにもしない」と言うので、母親を呼び、15分で切り上げて帰ることにした。荷物を持つ、持たないで母親と言ひ合いになり、機嫌の悪い状態のまま帰宅。

X+1年8月23日

「今日はなにをやる？」と言葉をかけると、レッスン内容を書いた付箋を自分から選んで並べた。

しかし、レッスンを始めようとする、楽譜を手提げ袋から出すまでに時間がかかり、なかなか始めることができない。弾き始めても、鍵盤に手をかけて立ち上がったたり、他の話をしたり、集中することができない。なんとかながら、本人が決めた内容を終えた。



写真③ X + 1年8月23日

Aさんの決めたレッスン内容を付箋に書いて貼る

X + 1年8月30日

この日のレッスンの始まりは順調であったが、途中から靴を脱ぎ、裸足で教室を歩き回り弾こうとしない。「弾いてみよう」という言葉かけには「弾くのは嫌だ」、「じゃあ終わりにする？」にも「嫌だ」と言うので、手遊び歌を弾いて聴かせたり、話かけたりしたが、ピアノには座ろうとしなかった。

ドリルを開くと、気が向いたように机に座り、1頁ほど一緒に色塗りなど行った。「もう少しやりたい」と言ったが、約束の30分の時間を過ぎたので終了を告げた。帰り際に、「ピアノを弾きたくないのだったら、お母さんと話をしな」と声をかけたが、それに反応はなかった。

X + 1年9月6日

レッスンの開始前に、母親から「Aさんが中学生になったら吹奏楽に入りたいと言っている。音楽が好きになってくれてうれしい。」との報告を受けた。その話を母親の隣で聞いていたAさんは機嫌が悪く、廊下の長椅子から立ち上がろうとせず、レッスンを始めるまでに時間がかかった。

レッスン後に、母親から、「吹奏楽をやりたいう夢は内緒だったようです。私の発言でレッスンができなかったようで、反省しています。」とのメールがあった。日常的に母親がAさんへの対応にとっても気遣っている様子であったことが窺える出来事であった。

X + 1年9月17日

ピアノ以外の楽器にも興味を持つようになったAさんのために、大学生による打楽器のコンサートの案内をしていたが、台風のためコンサートは延期となった。とても楽しみにしていたAさんが反動で気落ちすることを心配した母親からは、「日程変更ではなく、中止ということにしてほしい。」との連絡があった。

X + 1年10月11日

レッスンの前半20分は机に座り、集中してドリルをやり、音部記号を丁寧に書けるようになった。その後、「今日は新しい曲を弾こう」と声をかけると、「知ってる曲がいい」と言い、「きらきら星」を弾くように促すと、楽譜を見ずに耳で覚えている音を探りながら弾いた。何度か一緒に繰り返し、止まらずに弾けるようになったので、「お母さんにきいてもらおうよ」と言うと、急にピアノから離れ、首を横に振った。言葉をかけてもAさんは機嫌が悪そうに、首を横に振るばかりで何も話をしなくなったため、5分ほど早めにレッスンを切り上げた。

母親には、初めて弾いた「きらきら星」が上手に弾けたことを伝えたが、Aさんは母親の手を引っ張るようにして黙ったまま、挨拶もしないで帰ってしまった。

写真④ X + 1年10月11日
レッスンに集中できない様子

X + 1年10月17日から10月末まで

Aさんの体調が悪く、レッスンを欠席。

X + 1年11月1日

レッスンの冒頭から、「疲れた」と言い、弾こうとしなかった。新しい曲を譜読みするよりも、すでに弾けるようになっている曲を弾かせるほうがAさんの気が進むかと思い、「今までに練習した曲を復習してみよう」と声をかけた。「こんな曲を弾いたよね。」「この曲、なんだったかな」と弾いて聴かせたが、Aさんの希望で取り上げた曲にも、「覚えてない」「好きじゃない」と言い弾かなかった。

後半は、机に座り、15分間ドリルをやった後、「一度だけ、ピアノを弾こう」と促すと、ピアノに座って得意な『こぎつねこんこん』を弾いた。



写真⑤ X + 1年11月1日
ピアノに座ろうとしないAさん

X + 1年11月25日

11月に予定していた3回目のレッスンの数日前に、母親からのメールにより、「家庭の諸事情により11月で退会します。」との連絡があった。最後のレッスンは、「Aさんも楽しみにしています。」とのことであった。

X + 1年11月29日

最後のレッスンの様子はいつもと変わりなく、Aさんはレッスンを辞めることも、今後のことにも触れずに帰っていった。

3-4-2 母親との電話によるその後の状況

X + 2年1月15日（4回目）

母親からのメールでの申し出により、突然終結となったレッスン。和田もとても驚いたが、母親の気持ちも少し落ち着いたであろうという時にこちらから連絡を入れ、電話でお話を聞いた。

現在、Aさんは妹と同じピアノの先生の所に通い始めた。Aさんは楽しそうにしているとのことであった。母親は「ピアノレッスンの2か所の送迎が大変だった」、「1日に済ませたかった」と語られた。「Aさんは先生が変わった当初は不安そうだったが、今は楽しそうに通っている。やっぱりピアノが好きなんだ」と言われた。現在の様子を尋ねると、成長なのか、習い事のせいかわからないと言えようになってきた。少し恥じらいがでてきたと思う。学校での困り事も少し減ってきた。「ピアノを習わせて良かったことはありませんでしたか？」と質問すると、「好きなものを見つけられた。そのことがAさんにとって、とても良かったと思う」と語られた。

4. レッスン内容のまとめ

1年2カ月に及ぶ、Aさんのピアノレッスンの様子について整理したい。

4-1 Aさんの特性

Aさんは、字を読むことが難しく、左手が動きにくい、自分の感情をコントロールすることが苦手である。そのため、学校での集団生活の中で困難を感じることはあったが、音楽に対する理解力は十分にあり、特に、譜読みに関する力は、短期間で順調に身に付けることができた。

身体的には疲れやすく、学校でのトラブル、運動会の練習やプール授業など、生活状況が影響し、ピアノレッスンに集中できないことも多かった。

ピアノレッスンでは、自分がピアノを弾くところを家族に見られるのを極度に嫌がった。しかし、一方で、母親に認めてもらいたいという気持ちは強く、母親の態度や言葉を気にしているようにみえた。

4-2 レッスン内容

Aさんのレッスン内容について、3期に分けて整理すると次のように示すことができる。

① ラポール形成期（約2か月）

Aさんの興味をピアノにひきつけることができた。レッスンに来ることに慣れ、開始時にみせていた緊張も解けた。

② 成長期（約4カ月半）

毎回のレッスンにより、習得を積み重ねることができた。自宅での練習も自主的にするようになった。

③ 低迷期（約6か月）～突然の終結

妹の教材に合わせてほしいという母親の申し出により、教材を変更した。同時に、Aさんも母親も、妹の進捗と比較する発言が増えた。レッスン中に集中力を欠き、ピアノに座ることも難しくなった。「できない」「わからない」「嫌だ」という言葉が増え、レッスン時間を早く切り上げて帰るようになった。

4-3 レッスンの成果

1年と2カ月の間に、少しずつではあるが、Aさんの学習は進んだ。大譜表の曲を譜読みし、両手で弾き、記譜することもできるようになった。『こぎつねこんこん』『かっこう』『さんぽ』『きらきらぼし』『クラリネットこわしちゃっ

た』など曲のレパートリーが増え、テクニック教材1冊、音楽理論のドリル1冊をほぼ最後まで終えることができた。

5. 考察

5-1 レッスンにおける問題点

Aさんからネガティブな発言が出るようになったのは、教材を変更したことがきっかけであったと考える。この件について、母親、Aさんの立場から考察したい。

本研究のレッスン開始当初は、教材を特定せず、随時、Aさんの進度と理解度に合わせた教材を組み合わせて使用していた。中には、末永が手書きで作成した教材もあり、スケッチブックに貼り、自宅に持ち帰らせていた。母親に、教材の説明をした際に、「Aさんに合わせた教材を準備してもらい良かった」と言われたが、その一方で、「妹はちゃんとした本を使って練習している」という発言もあったことが思い返される。母親にとって、市販の教材を基に進めるレッスンが基準にあり、Aさんの教材が妹と違うのは、習熟度が満たないことが要因であるかのように否定的に捉えられていたのだと考える。母親の理解を得るためには、選択する教材について十分な説明が必要であった。

さらに、同じ教材を使用することにより、ピアノ学習期間が長い妹とAさんとの進度の違いが明らかとなった。このことが、Aさんの自信を喪失させ、自己否定に繋がったと考える。このような事例は、前もって予測されることであり、保護者からの希望であったとしても、教材の選択には慎重な吟味が必要であった。

一方で、母親からの関与が、生徒と指導者との関係に影響を及ぼす可能性も考えられる。本事例では、毎回レッスン後に、母親にレッスン内容や進度を報告するようにしていた。しかし、それが結果として、1対1の関係に、Aさんレッスン時間の中で積み重ねていたAさんとの関係に母親を挟む形になってしまった。Aさんには、母親から認められたい気持ちが大きく、同時に、母親が満足する結果が得られなかった時を恐れる気持ちも大きかった。それだけに、Aさんと末永との関係に母親を挟んだことが、指導の進め方に支障を生じたと考える。指導者として、生徒との信頼関係と同じように、保護者との関係性においても十分配慮する必要があることがわかった。

5-2 ウンセリングの進め方における問題点

本事例では、和田がレッスン時間とは別教室でカウンセリングを行った。母親のAさんに対する感情を聞き取ることで、母親の不安を少しでも緩和しようとおもって試みたが、Aさんの母親にとっては、必要なことであったかどうか、定かではない。飯野(2020)は、自閉症スペクトラム児を持つ母親が持つ養育感情は、①現状肯定感・そのまのペースで良い②成長の実感・子どもの成長を感じる③負担感・子どもの状態を負担に感じる④戸惑い・対応についてわからない⑤環境への期待・子どもの周囲の環境が変わってほしい⑥改善への期待感・最低限ある部分は成長してほしい⑦責任感・親がなんとかしないといけない⑧諦観・障害だからしょうがない、あきらめている、と言うような感情体験を説明している。Aさんの母親もまた、これらの感情で揺れていたと考えられた。

今回は、母親の気持ちを『話を聞く(傾聴)』という形でサポートしたつもりであったが、毎週・隔週とかではなく、レスナーとの相談の上、何か月に一回という実施では、無理があったのかもしれない。Aさんの母親にとって和田との時間は、最初はカウンセリングへの興味も相まって、スムーズに進んでいったが、段々自分の感情が明らかになり、「妹は可愛い」等、今まで意識していなかった感情が露呈し、その結果、母親がピアノレッスンに通わせること自体も嫌になっていたのではないかと推測される。

飯野(2019)は、発達障害を持つ保護者の支援ニーズは、保護者の「気づき」に応じたタイムリーな相談の開始、初期における集中的な相談の実施、日常的な葛藤を受け止め理解した支援、専門的なアセスメントに基づく支援リソースの提案が必要であると述べている。

本事例では、ピアノ実践人間学的メソッドとして、カウンセリングの立場から保護者の意見を聞き取った。先に述べたように、Aさんの習熟度に関する認識には、保護者と指導者の間での相違があった。和田の立場としてはその相違を埋めるべく対応すべきだったと考える。

6. まとめ

本事例は、もう少しレッスンを続けて欲しかったという、レッスン担当者・カウンセリング担当者の気持ちを残しながら、最終したレッ

スンではあった。しかし、母親が最後に「好きなものを見つけられた。そのことがAさんにとって、とても良かった」と語られたように、Aさんがその後も、ピアノを楽しんで続けているという成果が得られて良かったと考える。

母親の話によると、今も楽しくピアノを続け、近々、ピアノの発表会にも出る予定だと言うことであった。

7. 今後の課題

ピアノレッスンは、自宅からも、学校からも離れた場所で行われる。しかし、子どもの家庭環境や学校生活と切り離して行うことはできない。子どもと指導者の関係だけでなく、保護者と指導者、保護者と子どもの関係にも配慮しなければならない。今回、「音楽療法」「心理療法」の観点から実施した保護者へのカウンセリングにより明らかとなった問題に対して、ピアノレッスンを通してどこまで関与し、対応することが可能であるか、今後の研究の課題としたい。

注

1) 広島文化学園大学 学芸学部・教育学研究科

研究倫理審査委員会の承認を得て本稿を執筆した。受付番号 (05009)。

2) 自分と他者との間に橋を架けるように信頼関係を築き、良好な人間関係を保つこと

参考文献

- 末永雅子・和田玲子 (2020) 「発達障害児に対するピアノレッスンメソッドの確立～『音楽療法』の視点を通して～」『広島文化学園大学学芸学部紀要』第10号. pp.19-27.
- 飯野雄大 (2019) 「発達障害児を持つ保護者への地域における支援についての考察」『白梅学園大学・短期大学紀要』 pp.39-52.
- 飯野雄大 (2020) 「自閉症スペクトラム児を持つ母親が経験する『デイリーハッスル』」『心理科学』第41巻2号 pp.1-16.
- 金沢吉展 (2019) 「心理療法の終結に関する研究：文献レビュー」『明治学院大学心理学部附属研究所年報』第12号. pp.53-65.
- 末永雅子 (2011) 「ピアノ学習への課題」『広島文化短期大学紀要』41号 pp.115-125.
- 末永雅子 (2013) 「親が習い事に求めるもの：ピアノを習わせている親への調査に基づいて」『広島文化学園大学学芸学部紀要』 pp.9-17.